

道徳科研究部会

I 本年度の研究の進め方

1 研究主題

(1) 県主題

「自他との対話を通して、物事を多面的・多角的に考え、自己を見つめて、自己の生き方についての考えを深め、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度をはぐくむ授業の充実」

(2) 地区主題

「道徳科において自他との関わりの中で自己を見つめ、道徳性をはぐくむ授業」
～ 多面的・多角的に考え、伝え合う、対話的な深い学びを通して ～

2 研究のねらい

道徳科において、多面的・多角的に考え、伝え合う、深い学びの指導法の工夫・改善を通して、自他との関わりの中で自己を見つめ、道徳性をはぐくむ指導の在り方を明らかにする。

3 研究の進め方

(1) 主題について

県研究主題を受け、研究校である本校の研究主題を相馬地方の研究主題として、各校で研究を進める。

(2) 研究の内容

① 1年次 「多面的・多角的に考え、伝え、認め合う児童の育成を目指して」

② 2年次 「多面的・多角的に考え、伝え合う、対話的な深い学びを通して」

ア 視点との関わりを通して、多面的・多角的に考えさせるための指導法の工夫

(ア) 学習課題の提示（教材との出会い、日常生活のアンケートから）

(イ) 考え、伝え、認め合う活動（教師の発問、役割演技、学習形態の工夫、多様性の認め合い）

イ 自己を見つめ、自己の生き方について考えるための振り返りの工夫

(ア) 道徳的価値を自分事として捉えさせる振り返り（発問の工夫、時間の確保）

(イ) 自己の生き方について考えさせるための振り返り

（ワークシート、教師の説話、ゲストティーチャーの活用）

③ 3年次 「道徳性に係る成長と評価のあり方を通して」

(3) 研究の方法

① 研究主題をもとに、研究部員が実践を積み重ねる。

② 研究協議会は、研究校が2学期の研究授業に予定している資料を用い、発問についての研究協議を進める。また、研究協議会に講師を招聘し、指導助言を受けることで研修を深める。

③ 研究授業を通して、指導案の作成や資料のよりよい活用の仕方、発問や板書等について研修を深める。

II 研究協議の概要

1 第一次研究協議会の概要

(1) 期日 令和5年 7月24日(月)

(2) 会場 南相馬市立鹿島小学校

(3) 指導助言者 福島大学人間発達文化学類 特任教授 宮武 泰 様

(4) 研究概要報告（授業実践報告）

① 第2学年2組（6月20日）

ア 授業テーマ

家庭との連携を通して生命の大切さを多面的、多角的にとらえ、日常生活と結びつけることで、生きる喜びを感じ、自分の命を大切にしようとする心情を育てる授業。

イ 主題名・教材名

いのちの たんじょう (D-17) 生命の尊さ「おとうとの たんじょう」(光文書院)

(ア) 成果

- 家族からの手紙をもらうことで、家族が自分をどのように思っているかがわかった。自我関与という点において適した方法であった。
- ワークシートが手紙の返事を書くという形であったため、子どもたちの書きたいという意欲が高まった。
- 「命名」という言葉の意味を確認することで、教材の核となるものに近づくことができた。
- 時の流れを表した構造的な板書が、多面的・多角的に考える手立てになっていた。

(イ) 課題

- 手紙を読む際に、主人公の気持ちを照らし合わせながら読ませるとより効果的であった。
- おうちの人からの手紙が、気持ちのこもったものが多く、2年生という発達段階にしては長文であったため、教師がレイアウトを工夫して用紙を渡す必要があった。
- 2年生という発達段階において、これからどのように生きていきたいのか、なぜ命を大切にしていくなのかということを書き出すのは少し難しい活動であった。そのため、観点を提示したり、例文を提示してつなげて書けるようにしたりするなどの手立てが必要であった。
- 教師の発言が多かったため、問い返して子どもたちに考えさせるきっかけを作ることが必要であった。
- 自分を見つめることができる手立てとして、自我関与がキーワードになる。教材の中で、自我関与ができる人物を探すことで、ねらいを達成しやすくなる。

② 第4学年2組 (6月19日)

ア 授業テーマ

話し合い活動を通して、生命の大切さを多角的にとらえ、自己の生き方を見つめ、命を大切にしようとする心情を育てる授業。

イ 主題名・教材名

みんなの命 (B-18 生命の尊重) 「せいっぱい生きる」(光文書院)

(ア) 成果

- グループや立ち歩いて、隣同士など、様々な形態で話し合っ、考えが広がった児童もいた。
- 児童の聴く姿勢や発表する姿勢がよく、考えを深めることができていたのではない。
- 振り返りシートで書き出しがまとめられていて、今までの生き方や今後の生き方を見つめながら、具体的に振り返っていた。
- 事前アンケートの結果を電子黒板に写しておくことで、子どもが変容を感じ取ることができていた。
- ゲストティーチャーの動画や教師の説話があることで、現実の話として自分事として捉えやすくなっていた。
- 導入で事前アンケートをテキストマイニングで共有・可視化することで、問いを短時間でつかむことができていた。

(イ) 課題

- ペア・グループで話し合う時間が短かった。もう少し時間を確保すると考えを深めることができるのではない。
- 振り返りの際に、「最初と考えが変わった？」と聞くことで、子どもの変容を把握できたのではない。
- 事前アンケートの結果を子どもに配っておくと、より変容を感じ取らせることができた。
- ゲストティーチャーの動画の後に振り返りをした方が、自分の考えを深めることができたのではない。
- 似たような発問が多かった。発問を精選し、自我関与の時間を多く取り入れるとよい。

③ 分科会

下学年A・B・Cグループ、上学年A・B・Cグループに分かれ、1年「わきだしたみず」(生命の尊さ)、6年「お茶の心」(伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度)の教材をもとに、発問を中心とした指導案を作成し研究協議する。また、道徳科授業の課題を共有。

(分科会協議より)

- 下学年

- ・ 内容把握のために教材を先に読ませておく。
- ・ 中心発問は、なぜかには、休みなしにほりつづけることができたのでしょうか。
- ・ 自我関与させるためには、避難訓練の写真を提示して、自分たちの命を守ってくれている人の存在を考えさせる。
- ・ 自然災害時の協力についてゲストティーチャーに話してもらう。
- ・ 友情や努力と強い意志などの価値にいかないように教師がコーディネートしていく。

○上学年

- ・ お茶にはどんな作法があり、どんな思いがあったかなど基本発問をしてから、もてなしの心とは、どんな心だろうという中心発問にもっていく。
- ・ 伝統文化であるので、礼儀にいかないようにする。
- ・ もてなしは昔からあるもので、日本の伝統文化であるという終末につなげる。
- ・ 外国から見た日本人の印象の話などの説話。

④ ご指導

ア 授業改善へのアプローチ

- ・ 教材分析から道徳科の授業を構想するというのは、教材分析により道徳的問題場面を構造化し、発問と板書の整合性を図ることである。

イ 道徳科の授業について

- ・ 導入（道徳的価値への方向付け）、展開前段（追求把握）、展開後段（道徳的価値の内面的自覚）、終末（実践への意欲付け）に分けられる。
- ・ 終末では、なかなかできることではないという共感的理解を深める場。
- ・ 教材分析構造化により分析し、授業過程から発問及び発問構成、板書構成まで構想することができる。

ウ 導入について

- ・ ねらいとする道徳的価値に対する導入と教材を題材にした導入の二通りあるが、道徳的価値に対する導入で進めていく。

エ 発問について

- ・ 中心発問…考えさせたい、話し合わせたい内容を問う。
- ・ 基本発問…中心場面を考えさせる上で、事前に押さえておかなければならないこと。
- ・ 補助発問…筋道に戻したり、揺さぶったりするなど話し合いの方向性を示す。

オ 板書について

- ・ 道徳的問題場面を構造化して表す。



Ⅲ 研究の成果

- 2年次として研究推進校の実践状況の報告を開催し、発問を中心とした指導案を作成することにより、会員相互の実践研究につなげることができた。
- 構造的板書により、子ども自身が現在の自分ほどのような判断をするのかを確かめられることを大切にできた。
- 教師の説話やゲストティーチャーの活用により、ねらいとする道徳的価値に迫ることができた。
- 「ハートフルだより」の継続で教師の道徳授業の質的向上を図ったり、授業の内容を道徳だより等で知らせることで家庭や地域とのつながりを深めたりすることができた。

Ⅳ 反省と今後の課題

- 教材分析において、道徳性をはぐくむために考え話し合わせることは何か、しっかりとおさえ、中心発問補助発問を構成していくことが大切である。必要な原因や要因について取捨選択していくことで発問が精選されていく。
- 資料から離れ、自分事として捉え、自己の成長を自覚できるような振り返りの設定が課題として挙げられる。